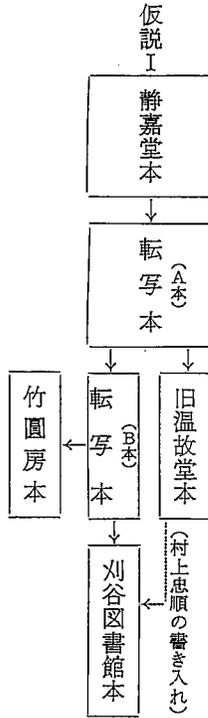


運歩色葉集の新写本(六本)について

清水登

筆者は、以前、「静嘉堂文庫蔵運歩色葉集」とその新写本(江戸末期)、三本(『温故堂文庫旧蔵本』、『竹圓房本』、『刈谷市立図書館蔵本』)について書誌的面から考察したことがある。その結果を要約すると、大略次のようになる。^{注1}



右の新写本、三本についてその系統を特徴付ける根拠として次の二点が存する。

新續古今集 后花園永享十戊午被撰之
至天文十七戊申百十一年也 (静嘉堂本)

新續古今集 后花園永享十戊午被撰之
百十一年 (旧温故堂本、竹圓房本、刈谷本)

儒釋道 孔子釈迦老子謂三教 (静嘉堂本)

儒釋道 孔子釈迦老子三教ト云 (旧温故堂本、竹圓房本、刈谷本)

四月 卯月初夏孟夏首夏
仲呂朱明朱夏 (静嘉堂本)

四月 (旧温故堂本、竹圓房本、刈谷本)

とあって、「静嘉堂本」に対し、新写本、三本の記載の仕方に共通面が数多くみられ、

(1) 新写本の三本は、「静嘉堂本」の転写本(A本)と同系統のものである。

また、「旧温故堂本」ならびに「竹圓房本」、「刈谷図書館本」の関係を示す次のような特色が存する。

(2) 「竹圓房本」は、四冊第四五葉表を白紙とし、「四句偈」、「摺鼓」、「泗洲」の注文を欠いている。しかし、「旧温故堂本」にはそのようなことがない。また、「刈谷図書館本」はその欠文を村上忠順の書き入れによって補筆され、^{注2}原形は「竹圓房本」と同じであったものと考えられる。

そこで、これら三本の新写本のはかに三本の新写本(『太田全齋旧蔵本』、『三園本』、『榊原芳埜旧蔵本』)を披見する機会を得たので、仮説Iを検証しつつ、運歩色葉集の新写本、六本について検討してみようと思ふ。

(一) 伝本について

古写本系の「静嘉堂本」を含め、運歩色葉集の伝本、七本について解説する。

(1) 静嘉堂文庫蔵本 松井簡治博士旧蔵 乾坤二冊

巻首に「新井文庫」の朱印記を捺し、新井政毅旧蔵本である。「室町末期を降るまじき書寫本であつて、恐らく、天文十六・七年の著作年代を去る遠からぬ頃のもの」と川瀬一馬氏が比定されたものである。^注。本稿で示す新写本、六本はすべて本書の江戸末期における転写本である。

(2) 国立公文書館・内閣文庫蔵本 温故堂文庫旧蔵 四冊

「温故堂文庫」の朱印記を捺し、江戸末期に塙家で「静嘉堂本」を転写したものとされている。書写年代は不明。また、朱筆の書き入れが存在する。

(3) 竹圓房本 津市西来寺蔵 四冊

巻首に「西来寺蔵」、「伊勢西来寺」、「渡邊山淵書倉印」の朱印記を捺す。また、各巻末には「渡邊氏」の朱印を捺し、四冊第四五葉表は白紙のままである。書写年代は不明。

(4) 刈谷市立図書館蔵本 村上忠順旧蔵 四冊

「村上文庫」の朱印記が捺され、村上忠順の旧蔵本である。四冊巻末に朱筆で、

以塙本一校了 但年記ニ至テハ今按諸書ニ依テ訂之

嘉永五壬子年五月

とあって、本文中に村上忠順の書き入れが施されている。

また、四冊第六葉表に忠順とは別の人物と思われる書き入れが存し、朱筆で、

睡仁天皇明治

年都東京十三年

赤坂皇居建築

と記されている。これと同筆と思われる書き入れが忠順の書き入れとは別に一冊前段を中心に認められる。

「竹圓房本」において白紙のままであった四冊第四五葉表は、忠順の

朱筆の書き入れによって補筆されている。その他、一冊第三〇葉裏に「土産 土蔵 土瓶 土居」が、同冊第三三葉表に「取舎大平」が補筆され、「近衛」、「起単^{キダシ}」、「窮鼠」、「四句偈」、「摺鼓」、「泗洲」の注文も補筆されている。

なお、二冊第一葉と第三葉とに「縫物……類地^{オモチ}」の一葉分を重複する。二冊第二葉に「加部 鎌倉注至天文十六丁未四百三八年」の一文が存在する。他の新写本でカ部末に位置する付録諸項は本書において夕部(二冊末)に移されている。

(5) 国立文書館・内閣文庫蔵 太田全齋旧蔵 四冊

巻首に「浅草文庫」の蔵書印が捺され、太田全齋の旧蔵本である。各見返しに

明治五年壬申八月

納書籍館 五種之一

文部省出仕市川清流

とあって、本書が市川清流により内閣文庫に寄贈されたことがわかる。

本書の特色は、各新写本が一冊(イーリ)、二冊(ユーク)、三冊(ヤーユ)、四冊(メース)のように分綴されているのに対し、一冊(イーユ)、二冊(ワーク)、三冊(ヤーユ)、四冊(メース)となっている点である。

また、「静嘉堂本」を含め他の新写本は三冊第九葉と第十葉とが乱丁になっている。それが本書では正しい順序に修綴されている。

四冊第四五葉は白紙であり、書写写年代は不明。

(6) 三園本 名古屋大学附属図書館・岡谷文庫蔵 四冊

四冊巻末に朱筆で、

右四冊以塙氏之本令謄写記嘉永壬子年四月上旬

以神谷元平之本一校了 同年五月二三日

とあって、本書は嘉永五年上旬、三園によって「塙本」(温故堂本)よ

り転写されたものである。筆者の三園とは江戸時代の国語学者神谷三園のことと思われる。^{注4}

また、本書には名古屋大学附属図書館の図書支細書が貼付されており、それによると、昭和二十六年二月十五日に岡谷正男氏より同館に寄贈されたものである。

(7) 榊原芳埜旧蔵本 国立国会図書館蔵 榊原芳埜旧蔵 四冊

巻首に「故榊原芳埜納本」、「榊原家蔵」の捺印がある。四冊巻末に、

右囑忠韶瑠氏以其所蔵之本備写時嘗臘廿八故写誤頗多矣 然以斐紙贖

写者故脱字則鮮矣 将他日照善本訂其訛

明治十二年十二月 榊原芳埜

と記されている。また、書き入れが存する。

(二) 温故堂文庫旧蔵本と榊原芳埜旧蔵本について

「榊原本」は四冊巻末の識語によって「旧温故堂本」の転写本であることがわかる。

そこで、両本の本文を対校してみると、大略本文に異同はない。そのなかで次のような相違が存し掲げる（上段に『旧温故堂本』の本文を、下段に『榊原本』の本文を示す。以下、引用は、対校上必要と思われる本文の漢字のみとし、送り仮名、振り仮名、書き入れは必要に応じて付すことにする）。

- ① 梅月五月・梅月 ② 二水ン・二水 ③（本命元辰）大日
 槐存星・大日槐存星 ④（代指）金徽草葉火ニアフリテ……金徽草
 葉火ニアフリテ…… ⑤ 兼・兼 ⑥（續古今集）……文永二年丙
 子……天永二年乙丑…… ⑦（七張弓）……三番サンサイ弓藤ヲ七
 五三ニ使也……五番サンサイ弓藤ヲ七五三ニ使也 ⑧ 物故モ者・
 物故 ⑨ 鬼糸子・鬼糸子 ⑩（能名）安達厚・安達厚^原
- ①、②、③、④、⑤の「五月」、「ン」、「称」、「壺カ」、「モ者」の欠は

「榊原本」の誤写によるものと考えられるが、④の「徽↓微・葉↓業」、⑥の「文↓天」、⑦の「三↓五」は単純な誤写とは考えにくい。そこで、各新写本にその類例をもとめると、次のようになる。

續古今集……天永二年丙子……（三園本）
 代指 金徽草葉火ニアフリテ……（三園本）
 七張弓……五番サンサイ弓藤ヲ七五三ニ使也（太田本、竹園房本、刈

谷本）

（能名）安達原（太田本、竹園房本、刈谷本、三園本）

鬼糸子（三園本、刈谷本）

「榊原本」の本文に「旧温故堂本」以外の新写本、「三園本」、「刈谷本」が関与しているように思われるが、用例が少ないため推断しかねる。次に「旧温故堂本」と「榊原本」との緊密さを示す例を掲げる。

① 灯臺鬼……其子粥宰相往支那尋父云流淚……（静嘉本）

灯臺鬼……其子粥宰相往支那尋父云流淚……（三園本、太田本、刈

谷本、竹園房本）

灯臺鬼……其子粥宰相往支那尋失云流淚……（旧温故堂本、榊原本）

② 准（静嘉本、三園本、太田本、竹園房本）

准（刈谷本）

准（旧温故堂本、榊原本）

③ 木丸殿（静嘉本）木風殿（三園本、刈谷本）

木丸殿（竹園房本）

木風殿（太田本）

不風殿（旧温故堂本）

不丸殿（榊原本）

以上の結果から、細部に些細な問題を含みながらも、大略「榊原本」は「旧温故堂本」の転写本と認められるのである。

(三) 旧温故堂本と三園本について

「三園本」は四冊巻末の三園の識語によって「旧温故堂本」の転写本とされている。そのことは次の例によって窺える。

解倒懸……………聖武天皇天平聖暦五年癸酉始行之
至天文十六年丁未八百二十年也 (旧温故堂本)

解倒懸……………聖武天皇天平聖暦五年癸酉始行之
至天文十六年丁未八百二十年也 (三園本)

解倒懸……………聖武天皇天平聖暦五年癸酉始行之
至天文十六年丁未八百二十年也 (榊原本)

解倒懸……………聖武天皇天平聖暦五年癸酉始行之
至天文十六年丁未八百二十年也 (静嘉本、竹園房本、太田本)

解倒懸……………聖武天皇天平聖暦五年癸酉始行之
至天文十六年丁未八百二十年也 (刈谷本)

それでは、両本の本文が相違する例を次に掲げる(上段に『旧温故堂本』の本文を、下段に『三園本』の本文を示す)。

①(一疋)……………絹亦一疋者……………絹布一疋者……………犯冉・犯用

③(四手綱)……………千金莫……………千余莫……………達磨大師……………一十

廿一年也……………一十廿一年也……………代指……………金微草葉火ニアフリテ……………

……金微草葉火ニアフリテ……………競馬……………又武慶雲三丙午……………

……文武慶雲三丙午……………愛岩護・愛岩護……………硯水……………凍入回則……………

……凍入酒則……………(珊瑚)生水底之石……………生水底之名……………(箕

面寺)……………白鳳廿一年巳立……………白鳳廿一年巳丑……………(朱雀日)……………

……造作ホ忌之……………造作等忌之……………(永楽銭)……………六弥太虫澄始テ……………

……六弥太虫澄始テ……………(氷室)……………人皇十九代仁徳天皇……………人

皇十九代仁治天皇……………(平等院)……………四百九十九年也……………四百五十

以年也……………(上)……………(下)……………(上)……………(下)……………

「万」、「刀」、「八」を「三園本」が欠いている。これらは、「三園本」の脱落によるものと考えられる。①③⑤の例は各写本では次のようになっている。

一疋……………絹亦一疋者……………(静嘉本、太田本、竹園房本、刈谷本、榊原本)

四手綱……………千金莫……………(静嘉本、太田本、竹園房本、刈谷本、榊原本)

「一疋」、「四手綱」の二例は各写本の全例ともに「旧温故堂本」と一致していることから、「布」、「余」は「三園本」による誤写と考えられる。

代指……………金微草葉火ニアフリテ……………(静嘉本、太田本、竹園房本、刈谷本)

代指……………金微草葉火ニアフリテ……………(榊原本)

これは「三園本」の孤例を「榊原本」が踏襲しているかたちになっている。これも「三園本」による誤写例と考えられる。

達磨大師……………一十廿一年也……………(静嘉本、竹園房本、榊原本)

達磨大師……………一十廿一年也……………(太田本)

達磨大師……………一十廿一年也……………(刈谷本)

これは「旧温故堂本」の書き入れを参照し、「三園本」において改めたことによるものか。

犯冉……………(静嘉本、太田本、榊原本)……………犯用……………(竹園房本、刈谷本)

競馬……………文武慶雲三丙午……………(静嘉本)

競馬……………文武慶雲三丙午……………(竹園房本)

競馬……………又武慶雲三丙午……………(太田本、刈谷本、榊原本)

珊瑚 生水底之石（静嘉本、榑原本）

珊瑚 生水底之名（太田本、竹圓房本）

珊瑚 生水底之名（刈谷本）

箕面寺……白鳳廿一年巳立……（静嘉本）

箕面寺……白鳳廿一年巳立^辛……（刈谷本）

箕面寺……白鳳廿一年巳立……（太田本、竹圓房本、榑原本）

朱雀日……造作ホ忌之（静嘉本、榑原本）

朱雀日……造作ホ忌之（太田本、竹圓房本）

朱雀日……造作ホ忌之（刈谷本）

永楽銭……六弥太虫澄始^テ……（静嘉本）

永楽銭……六弥太虫澄始^テ……（太田本、竹圓房本、刈谷本、榑原本）

氷室……人皇十九代仁徳天皇……（静嘉本、太田本、竹圓房本、榑原本）

氷室……人皇十九代仁治天皇……（刈谷本）

平等院……四百九十九年也（静嘉本、太田本、竹圓房本）

平等院……四百九十九年也（刈谷本）

平等院……四百九十八年也（榑原本）

蛸^上蛸^下（静嘉本、太田本、刈谷本、榑原本）

蛸^上蛸^下（竹圓房本）

右の結果の示すところにより、大略「三園本」は「旧温故堂本」よりの転写本と考えて差しつかえない。

しかし、「三園本」の本文には、「竹圓房本」・「刈谷本」系統の本文の影響によると認められるものが散在し、そのなかでも「刈谷本」よりの影響が顕著である。

そこで、「旧温故堂本」には認められない「三園本」独自の書き入れを次に掲げる。

①（亥子餅）……十月亦亥日……（静、温、榑、太、竹）……十月亦

亥日……（三、刈） ② 哇^{イカ}犬（静、温、榑、太、竹）・哇^{イカ}犬（三）

嘸（刈） ③ 穴^{イナシラニシ}以句賤（静、温、榑、太）・穴^{イナシラニシ}大^一以句賤（三）

穴^一大^一以句賤（竹、刈） ④（六和香）甘松（静、温、榑、太）・井松

（竹）・甘松（三、刈） ⑤ 日連宗……十月十三日……（静、温、榑、

太、竹）・日連宗……十月十三日日蓮寂……（刈）・日連宗……十月十

三日日蓮寂カ（三） ⑥（法住院殿）御名乘義高義澄……（静、榑、温、

太）・御名乘義尚義澄……（竹、刈）・御名乘義高義澄……（三） ⑦（考

妣）生由父母死日——考父妣日（静、太）・生日父母死日——考父妣日

（温、榑）・生田^{日父}母死日——考父妣日（刈）・生日父母死日——考父

妣日（三、竹） ⑧（雲居寺）……深草永和四丁巳……（静、温、榑、

太、竹）……深草永和四丁巳……（三、刈） ⑨（黒日）正成二辰……

……（静、太、竹、刈）・正成一辰……（温、榑）・正成一辰……（三）

⑩（楊枝）梵網経云齒木也（静、温、榑、太）・梵網経云齒木也（竹）

梵網経云齒木也（三）・梵網経云齒木也（刈） ⑪（八坂塔）……七百

六十三年也（静、太、竹、榑）……七百六十三年也（三、刈）……

七百六十三年也（温） ⑫（摩醯修羅天）知両降致（静、温、榑）・知

両降致（太、竹）・知両降致（刈）・知両降致（三） ⑬（元亨釋書）……

元亨ニ壬戌滅……（静、太、榑）……元亨ニ壬戌……（竹、温）……

元亨ニ壬戌成……（刈）……元亨ニ壬戌滅……（三） ⑭ 福部（静、温、

榑）・福部（太）・福部（三、竹、刈） ⑮（興嚴寺）南都鏡常四……

（静、温、榑、太、竹）・南都敏達帝鏡常四……（三、刈） ⑯（金光明

経）——元庚子……（静、太、竹）……元庚子……（温、榑）……

元庚子……（三、刈） ⑰（弘法大師）……延喜廿一年辛巳謚……（静、

温、太、竹、榑）……延喜廿一年辛巳謚……（三、刈） ⑱（西大寺）……

……七百九十年也（静、温、榑、竹、太）……七百九十年也（三）……

……七百五十年也（刈） ⑲（三界内諸天）……切利夜^切广^切兜卒染他化……

（静、温、榑、竹、太）……切利夜^切广^切兜卒染他化……（三、刈） ⑳

(鬼宿日)……七廿五日八廿二日……(静、竹、温、榊)……七十五
 日八廿二日……(刈、太)……七廿五日八廿二日……(三) ② 復
 風(静、温、榊、太、竹)・復風(三、刈) ② 受持(静、温、刈)・
 受持(太、竹、刈)・受持(三) ② 巡役(静、温、榊、太、竹)・
 巡没(刈)・巡没(三) ② 風執風縁風意(静、温、榊、竹、太)・風
 執風縁風意(刈)・風執風縁風意(三) ② 賤熊(静、温、榊、竹、
 太)・賤熊(三、刈) ② 磁石山(静、温、榊、太、竹)・磁名山
 (刈)・磁石山(三) ② 白河瀧(静、温、榊)・白阿瀧(太、竹)・
 白阿瀧(刈)・白河瀧(三) ② (四本懸)……切立之間廣二丈三尺也
 (静、温、榊、太、竹)……切立之間廣二丈二尺也(刈)・切立之間廣二
 丈三尺也(三) ② 碑礫(静、温、榊、太、竹)・碑礫(刈)・
 (三) ② (兵庫築島)高倉永安三……(静、太、竹)・高倉永安三……
 ……(温、刈)・高倉永承二……(榊)・高倉永安三……(三) ③ (解)
 随衛入……(静、温、榊)・随衛入……(太、竹、刈)・
 随衛入……(三) ③ 大角豆(静、温、榊、太、竹)・人角豆(刈)・
 大角豆(三) ③ 兎糸子(静、温、太)・兎糸子(竹)・兎糸子(榊、
 三、刈)

右の対校の結果により、「旧温故堂本」に認められない、「三園本」独自の書き入れは、⑦の「考妣」を除き、全例とも「刈谷本」の本文または書き入れと一致する。このことは、三園が「三園本」を校訂する際に「刈谷本」系の底本を参照したための結果ではないかと考えられる。

「三園本」の7部に「福部」とある。それを注意してみると、書き入れの「心」は「べ」のうゑに書かれ、訂正した痕跡がある。これは、「三園本」の本文が「福部」とある「旧温故堂本」に基づき、書き入れに「福部」とある「竹園房本」・「刈谷本」系の底本を照参したことを意味する。また、このことは、「三園本」と「刈谷本」との書き入れの一致を「三園本」の書き入れを「刈谷本」が書き入れとして取り入れたと

する考え方の反証例ともなる。「三園本」の校訂に使用したと考えられる底本としては、「三園本」の四冊巻末に朱筆で、

以神谷元平之本一校了 同年(筆者注、同年とは嘉永五年のこと)五月二三日 三園

とあって、「神谷元平本」を挙げることができる。「三園本」の四冊第五葉表の「箕面寺」の条に「神谷元平本」の体裁を窺わせる次のような書き入れが存する。

箕面寺 撰州天武天皇白鳳廿一年己丑
 至天文七十八百六十八年也

……又一本白鳳二年己立ニ作ル 是ニヨレハ己ノ上ニ 辛ノ字ヲ脱
 シハ立ノ誤ナルベシ
 「箕面寺」の該当箇所は各写本によると次のようになっている。

……白鳳廿一年己立……(静嘉本)
 ……白鳳廿一年己立……(旧温故堂本)
 ……白鳳廿一年己立……(刈谷本)
 ……白鳳廿一年己立……(太田本、竹園房本、榊原本)

「刈谷本」には「辛」の書き入れが存し、「三園本」の三園の書き入れとすべて一致しない点が認められるが、三園が校訂に使用した「神谷元平本」を「刈谷本」系のものであると考え方は蓋然性の高いものと思われる。

(四) 太田全齋旧蔵本について

「太田本」は、四冊第四五葉表を白紙とし、「摺鼓」、「泗洲」の注文を欠いている。このことは、「竹園房本」ならびに「刈谷本」の、「旧温故堂本」その他の新写本と区別されるべき伝本上の特徴となっている。

したがって、「太田本」は大略「竹園房本」・「刈谷本」系のものであることができる。そのような見通しを踏まえながら、「太田本」について検証してみようと思う。

(A) 他の写本と比し、「太田本」、「竹園房本」、「刈谷本」においてともに欠文となっているものを次に掲げる(上段に『静嘉堂本』、『旧温故堂本』、『三園本』、『榊原本』を、下段に『太田本』、『竹園房本』、『刈谷本』を示す)。

- ① 天狗 熊野・天狗 ② 満仲 熊ノ名 卷絹 ③ 左近 唐名近衛・左近 ④ 榊 源氏物語之名・榊 ⑤ 近衛 左近ノ唐名・近衛
- (刈谷本のみ朱筆) ⑥ 起単 自退ノ義也・起単 (刈谷本のみ朱筆) ⑦ 窮鼠——遭咬猫・窮鼠 (刈谷本のみ朱筆) ⑧ 清水……田村丸立之……
- 田村丸 之…… (刈谷本のみ朱筆) ⑨ 银山鉄壁・银山鉄 ⑩ 城郭 三里日一七里日一・城郭 日一七里日一 ⑪ 婦翁 夫之母外舅 夫之父 自帝釈始也 ⑫ 少焉 ⑬ 四句偈 一切功德慈眼視衆生・四句 婦翁 外舅 ⑭ (七星) 巨文星 馬頭丑歳 巨文星 馬頭丑歳 (刈谷本のみ朱筆) ⑮ 爵 勿家持之・爵 公家 ⑯ 円覚寺 后宇多弘安 五十年至天文十七(戊申) ⑰ 円覚寺 壬午至天文十七 三百六十七年也 (戊申)あり ⑱ 四冊 第四五葉表 (刈谷本のみ朱筆) ⑲ 飛香舎 藤壺・飛香舎 藤 ⑳ 泗州 起於—— 摺鼓 孝謙女帝得道鏡大物…… 摺鼓 (刈谷本のみ朱筆) ㉑ 泗州 起於—— 僧迦也・泗州 (刈谷本のみ朱筆) ㉒ 庶羅波羅草 天竺有此草葉廣 馬食之則化為人 庶羅波 羅草 天竺有此草葉廣 馬食之則化 ㉓ 權華……上竹来以此詩意 鏡四ニ諸人(無)病…… (刈谷本のみ朱筆) ㉔ 權華……上竹来以此詩意 …… 權華……上[竹]来以此詩意…… (刈谷本のみ朱筆)

以上の対校結果により「太田本」、「竹園房本」、「刈谷本」の関係は一層緊密なものとなる。また、「刈谷本」は、その識語(以埒本一校了)が

示す通り、本文の欠を「旧温故堂本」によって補筆している。それでは、「太田本」の本文における「竹園房本」、「刈谷本」との関係はどのようになっているのであろうか。

(B) 「太田本」の本文が「静嘉堂本」、「竹園房本」、「刈谷本」の本文とともに一致し、他本と異なる例を次に掲げる(上段に『旧温故堂本』、『三園本』、『榊原本』を、下段に『静嘉堂本』、『太田本』、『竹園房本』、『刈谷本』を示す)。

- ① (放生會) ……七百九十二年……七百九十一年
- ② (唯輪) 延懸之事 (旧温故堂本、三園本)、延懸之事 (榊原本)・延懸之事
- (C) 次に「太田本」の本文が「竹園房本」および「刈谷本」の本文と一致し、他本と異なる例を次に掲げる(上段に『静嘉堂本』、『旧温故堂本』、『三園本』、『榊原本』を、下段に『太田本』、『竹園房本』、『刈谷本』を示す)。

- ① (鎌倉) ……四百廿八年 ② (楊貴妃) 唐玄宗之女・唐玄宗妾 ③ (馬隱) 孝徳女帝之夫也・孝徳女帝之大也 ④ 万倍日・万俗日 ⑤ 検使・検校 ⑥ (頭密) ……天台宗 ……天台字……⑦ (刑鞭) ……腐蜚空去……⑧ (建長寺) ……二百九十九年也……三百九十九年也 ⑨ (支番頭) 唐名又主客・唐名又至客 ⑩ (元亨釋書) ……后醍醐元亨二壬戌……故醍醐元亨二壬戌……⑪ (玄惠法印) ……公時有北畠……公時有北帝 ……⑫ (富士山) 人皇第七代……人皇第七代……⑬ (伏儀氏) ……三皇之始也……二皇之始也……⑭ (佛誕生) 卯月八日・四月八日 ⑮ (佛涅槃) 一月十五日・正月十五日 ⑯ (國司) ……伊勢——北畠殿……伊勢——北名殿 ⑰ 青羽山 又葉・音羽山 又葉 ⑱ (珊瑚) 生水底之石……生水底之名 ⑲ 遺誠・遺誠 ⑳ 未進・米進 ㉑ 受持・受持 ㉒ 集會・等會 ㉓ 鉦鼓 又征・鉦鼓

又任 ② 上表・上衣 ② 手灯・手丁 ② 白河瀧・白阿瀧

② 浄飯王 父・浄殿王 父 ② 悉達太子・悉連太子 ② (十支)

庚 上幸・庚 上帝 ② (十支) 己 大荒落・己 大荒落 ② 尋日七

尺・尋日七八 ② 役 行者賀茂俊公民也・役 行者賀茂俊土民也 ② 百

官・百官 ② 一抹 松・一抹 秋 ② 千倍日・千信日 ②

介・人 ② (鯉) …… 随衛入 …… 随術入 …… (櫻) 普賢堂・

普賢堂 ② (柑子) …… 八百卅四年也 …… 八百廿四也 ② 種・

以上の対校結果も「太田本」が「竹圓房本」および「刈谷本」と同系統であることを示している。

それでは、「太田本」の、「竹圓房本」ならびに「刈谷本」との先後関係はどうであろうか。

(D) 「静嘉堂本」と「太田本」との本文が一致し、「竹圓房本」ならびに「刈谷本」の本文と一致しない例を次に示す。

① (配帙) 祈祷ノフタ也(静、太)・祈禱ノアタ也(温、榊、三)・祈禱ノアタ也(竹、刈) ② (伯桑) 典天馬星也(静、太)・典天馬星也

(温、榊、三、竹、刈) ③ 犯冉(静、太)・犯冉(温、榊)・犯用(三、竹)・犯用(刈) ④ 動々万(静、太)・動々(温、榊、三、

竹、刈) ⑤ (中略) 柳青一獣 …… (静、太)・柳音一獣 …… (温、榊、三、竹、刈) ⑥ (考妣) 生由父母死日 …… (静、太)・生日父母死日

…… (温、榊、三、竹)・生田…母死日 …… (刈) ⑦ (國弘) 一条院御宇刀工也(静、太)・一条院御宇刀工也(温、三、刈)・一条院御宇

刀工也(竹、榊)

右の対校結果にみる通り、「静嘉堂本」と「太田本」とのみ一致するものが七例認められる。

したがって、「太田本」は「刈谷本」ならびに「竹圓房本」よりの転

写本ではない。

それでは、「太田本」は「竹圓房本」ならびに「刈谷本」のうち、どちらの系統に属するものであろうか。

(E) 「太田本」が「竹圓房本」の本文と一致し、「刈谷本」の本文と一致しない例を次に示す。

① 萬と(静、太、竹)・萬(温、榊、三、刈) ② 煙堀廻山ヲ

史(静、太、竹)・煙堀廻山ヲ 定 ③ (帆風) 左傳十一漚使不(静、太、竹)・

左傳十一漚使不(温、榊、三、刈) 筆者注、刈谷本は『漚』を墨で見せ消しにし、「漚」を墨で書き入れている

以上の対校結果を検してみるに、「刈谷本」①の「漚」は本文を転記する際、「漚」に書き改められたもので、「静嘉堂本」、「太田本」、「竹圓房本」の本文と一致する。「刈谷本」①は「漚」の脱落、②は「史」を

「夫」と誤写したものと推測が成り立つ。

したがって、ここに挙げた例は、「太田本」と「刈谷本」とを区別さるべき特徴とはならない。

(F) 次に「太田本」が「刈谷本」の本文と一致し、「竹圓房本」の本文と一致しない例を次に示す。

① 猶葉(太、刈)・猶葉(静、温、榊、三、竹) ② (継子立) 以碁石黒白仕之有口傳(静、温、榊、三)・以碁石黒白仕之金口傳(竹)・

以碁石黒白仕之全口傳(太、刈) ③ (不當) 食耽之義也(静、温、榊、三、竹)・食耽三義也(太、刈) ④ (不會) 不和合之義(静、温、榊、

三、竹)・不初合之義(太、刈) ⑤ (武庫) 兵庫之唐名(静、温、榊、三、竹)・兵庫之庭名(太、刈) ⑥ (藤原) 天智天王ノ時鎌足大臣…

…(静、温、榊、三、竹)・天智天王ノ時鎌足大臣…(太、刈) ⑦

(福徳方) ……(静、温、榊、三、竹) ……(太、

刈) ⑧(天台座主)文徳天皇始定慈覚也(静、温、榊、三)・文徳天皇格定慈覚也(竹)・文徳天皇作定慈覚也(太、刈) ⑨(春日大明神)金曳千日注連不利邪見之家(静)・金曳千日注連不到邪見之家(温、榊、三、竹)・金曳千日 連不到邪見之家(太、刈) ⑩(鬼宿日)……廿八廿五日……(静、温、榊、三、竹)……廿八七十五日(太、刈) ⑪(沙弥)馳鳥——自歳……(静、温、榊、三、竹)・馳鳥——白歳……(太、刈) ⑫(織染)織部正之唐名(静、温、榊、三、竹)・織部止之唐名(太、刈) ⑬(四天)……廣目天王……(静、温、榊、三)……廣国天王……(竹)……廣周天王……(太、刈) ⑭(七曜)日曜日—火—水—木—金—土—(静、温、榊、三、竹)・日—火—水—木—金—土—(太、刈) ⑮(七代)……惶根尊 陰神御長一丈五尺七寸……(静、温、榊、三、竹)・惶根尊 陰神御名一丈五尺七寸……(太、刈) ⑯(捐館)日大人之遠行(静、温、榊、三)・日大人之遠行(竹)・日大人之遠行(太、刈) ⑰木賊木ノ子(静)・木賊(温、榊、三、竹)・不賊(太、刈) ⑱(介)……伊井—遠江(静、温、榊、三、竹)……伊井—造江(太、刈) ⑲(鮪)……樂人之名也昔樂名也(静、温、榊、三、竹)……樂人之名也昔樂名也(太、刈) ⑳(斑鳩)臘納臍(静、温、榊、三、竹)・臘納術臍(太、刈) ㉑(斑鳩)……魚ト水トノ漁火ノ影……(静、温、榊、三、竹)……魚ト水トノ漁火ノ影……(刈)……魚ト水トノ漁火ノ影……(太)

右の対校結果から、「太田本」は、「刈谷本」の本文と多くの一致例を有し、「刈谷本」と親密な関係にあるようである。「太田本」と「刈谷本」との本文に一致は認められないが、両本の近さを示す次のような例も存する。

貼供 禪家行堂之官也(静嘉本、旧温故堂本、榊原本、三園本、竹園房本)

貼供 禪家行堂天官也(太田本)

貼供 禪家行堂元官也(刈谷本)

「太田本」について検討してきたことをまとめると次のようになる。

① 「太田本」は、「静嘉堂本」の転写本である「旧温故堂本」に比し、「竹園房本」ならびに「刈谷本」の特徴を有し、その点で「旧温故堂本」と区別される。

② 「太田本」には、他の新写本に比し「静嘉堂本」の語文を正しく継承している面がみられ、「竹園房本」ならびに「刈谷本」よりの転写本とは認められない。

③ 「太田本」とその系統に属する「竹園房本」ならびに「刈谷本」と比較すると、「太田本」が「竹園房本」に近いという特徴を「竹園房本」の語文より見出すことができず、「太田本」の語文とのみ共通し、両本の近さを示す特徴は「刈谷本」との間に存する。

以上の結果から、一応「刈谷本」は「太田本」よりの転写本であると認められるわけであるが、「太田本」には、他本に認められない、次のような「太田本」独自の語文が存する。

①(経典)……漢書廿卷……(静、温、榊、三、竹、刈)
(経典)……漢書卅卷……(太)

② 天龍寺……夢窓国師……(静、温、榊、三)

天龍寺……夢相国師……(太)

天龍寺……夢相国師……(竹)

天龍寺……夢 国師……(刈)

③ 善導和尚 天智天皇白鳳廿二壬午入滅
至天文十七年戊申八百六十七年 (静嘉本)

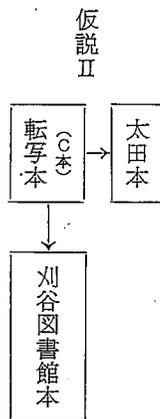
善導和尚 天智天皇白鳳廿二壬午入滅
至天文十七年 八百六十七年 (刈谷本)

善導和尚 天智天皇白鳳廿二壬午入滅
至天文十七年 八百六十七年 (旧温故堂本、三園本)

善導和尚 天智天皇白鳳廿二壬午入滅
至天文十七年 八百六十七年 (榊原本)

善導和尚 天智天皇白鳳十二年入滅 (竹圓房本)
 至天文十七年 八百六十七年
 善導和尚 天智天皇白鳳廿二年入滅 (太田本)

したがって、「太田本」と「刈谷本」との関係を示す仮説は次のようになる。



(四) 結論

筆者は、前述の新写本、六本のほかに「阿波国文庫旧蔵本」(国学院大学図書館蔵、四冊春、夏、秋、冬)を披見する機会を得た。本書は巻末に「圓満院法蔵」の印記を捺す。その特徴は、「竹圓房本」、「太田本」同様冬冊第四五葉表を白紙とし、「四句偈」、「摺鼓」、「泗州」の注文を欠いている。本文も、

鎌倉 鳥羽院保安元庚子立
 至天文十六丁未四百卅八年

四天 東方持國天王
 西廣周

(四星) 巨文星 馬頭丑歳
 亥歳

庶羅婆羅草 天竺有此草葉
 馬食之則化

とあって、「竹圓房本」、「太田本」、「刈谷本」の特徴を有している。

また、次のような例も存し、

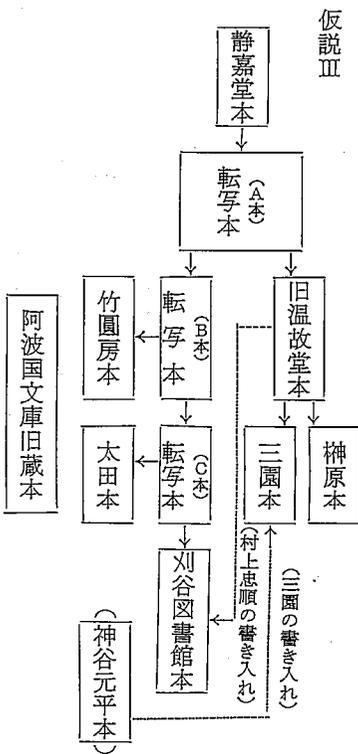
考妣 生日父母死日——考父妣母

競馬 五月五日於京賀茂文武慶雲三丙午
 始行之至天文十七戊申八百四十三年也

「三園本」の本文と一致する面も認められる。

それでは、(一)章、(三)章、(四)章で得た結果を仮説Iに挿入し、全写本の

系譜図を想定すると、次のような仮説IIIとなる。



今のところ、仮説IIIがあらゆる事実に対し、最も蓋然性の高いものと考えているが、「竹圓房本」と「刈谷図書館本」との間にみられる親密さは本説ではあまり反映されていないなど、問題を含んでいる。先学諸賢の御教示をお願い申し上げます。

- 注1 拙稿「静嘉堂文庫蔵運歩色葉集」と新写本長野県短期大学紀要38号。
- 注2 根上剛士『中世古辞書四研究並びに総合索引』(『影印篇』)二三頁。
- 注3 川瀬一馬『古辞書の研究』八九四頁。
- 注4 林義雄『古本下学集七研究並びに総合索引』七頁。